

# 言語教育のためのテキスト・スキーマ

ー 異文化間コミュニケーションの視点から ー

大 滝 敏 夫

## 0 まえがき

いかなるテキストもそれを取り巻く場面コンテキストの知識なしには理解できない。拙論『認知科学のテキスト言語学へのアプローチ』の風船の恋歌の場面テキストで明らかにしたように、テキスト理解は無意識のうちにそれを取り巻く場面コンテキストの知識を組み込んで行われているものである。コンテキストの知識とはいいい換えれば、テキストについての受容者の知識の中にあるスキーマである。例えば、封筒の中から取り出したテキストを、通常は「拝啓＋時候の挨拶…」で始まり、近況報告やその他を経て最後のほうに「用件」と「敬具／かしこ」で終わる手紙のスキーマを思い浮かべるだろう。ところで、外国語教育にはこのスキーマを知っていることが意外に重要である。ドイツ語の手紙は“Liebe 名前”で始まり、直ぐ「用件」が来る。「近況報告」や「時候の挨拶」は最後である。ドイツの手紙のテキスト構造は日本のそれと逆なのである。このスキーマを知らない限り、ドイツ語の手紙はうまく書けないし、理解の仕方も容易ではない。私の大学生がかつてDAADの留学生奨学金に応募したことがあった。その際、Bewerbungsbrief(願書の手紙)で、最初は個人的な事情を長々と述べた後で留学の目的を書いて失敗してしまった。が、次回の時にはドイツの願書スキーマである 1.留学の目的、2.その理由、3.経験とそれに基づく具体的計画、4.留学の意義の順序で、首尾一貫した書き換えを行わせて、実際に成功した。これはあるいはドイツの願書スキーマに限らず、場合によっては、日本の願書スキーマとしても通用することかもしれない。

これまでに、外国語教育にスキーマを利用したものが皆無であったわけではない。津田塾大学言語文化研究所読解研究グループの『学習者中心の英語読解指導』は、スキーマ理論に読解を組み合わせて、読解指導を行っている。しか

し、残念ながら段落読解と文単位の読解にとどまり、テキスト種類別スキーマは扱っていない。また異文化コミュニケーションを視野にいたれた教科書は、無意識ながら、大なり小なりさまざまな場面スキーマを問題にして、製作されているものが多い。しかしそのような教科書であっても、テキスト種類別スキーマを明確にして、指導しているものはない。外国語教育におけるスキーマ利用については、拙論『認知心理学に基づく外国語教育』の 3.2.1.1 および 3.2.1.2 の項で簡単に述べているが、本稿はその延長上にあり、より詳しいテキスト種類別のスキーマを探り、明確にすることによって、外国語教育(場合によっては日本語教育)に少しでも貢献できたらと思っている。

本稿の構成は：

- 1 認知心理学と言語学におけるスキーマ概念
- 2 テキスト種類別テキスト・スキーマ
- 3 結び

となっている。1 ではスキーマを巡る認知心理学と言語学の理論的背景であり、間接的にしか外国語教育と関係がない。外国語教育のためのテキスト・スキーマのみに関心のある方は 1 を抜きにして読んでも、差し支えないだろう。

## 1 認知心理学と言語学におけるスキーマ概念

### 1.1 認知言語学とテキスト言語学

テキストという概念は、予め誤解を招かぬように断っておくが、書かれたもののばかりでなく、対話や談話など話されるものを含め、あるまとまりと見なされるとき、テキストという。その中のあるまとまりは部分テキストとする。

チョムスキー理論を中心としたアメリカ言語学が 1990 年代になってようやく「意味」の側からの研究に向かい始めてきているが、1980 年代のレイコフの認知意味論を初めとしてラネカーの認知文法論など認知言語学が盛んになって来た。しかし意味の問題が人間の認知活動を抜きにして語られないことは 1970 年代で既に着手され、ドイツとアメリカで別々の発展を遂げていたのであった。一つはドイツのテキスト言語学であり、一つはアメリカの discourse analysis (談話分析)であった。両者が 1991 年 “Text and Discourse” 学会を設立し、

認知科学学会ともタイアップして毎年学会活動するに及んで、現在のラネカーを中心とした認知言語学が生まれたのである。レイコフの認知意味論はカテゴリーを、ラネカーを中心としたアメリカ認知言語学は語彙レベルと文レベルを、そしてテキスト言語学はテキストレベルを扱うのだが、いずれの場合でも人間の脳の知覚と語彙、文、テキストに対するイメージ・スキーマを巡って論を展開する点では一致している。

1970年代のテキスト言語学は Textsorten (テキスト種類) を 1. expliziter Text, 2. narrativer Text 3. Gesprächstext (conversation) の3種類に分けた (Gülich 1975, van Dijk 1980)。それはミクロ構造としての文レベルの (テキスト) 文法、マクロ構造としてのテキスト文法、(頭脳の中の) スーパー構造としてのスキーマに基づくものであった (van Dijk 1980)。

## 1.2 スキーマ概念

スキーマという概念はカントの『純粋理性批判』の中にもみられるが、心理学に使われるようになったのは、実に早く 1930 年代 Bartlett が最初であった。彼は『幽霊の戦い』というインディアンの話を欧米人に聞かせ、再生させると、記憶のゆがみが見いだされることを指摘した。つまり読者は決して話をそのまま自動的に受け入れるのではなく、自分なりに意味付与し、再生時にも自分なりに再構成することを発見した。このように物語を理解する際に読者がもっている枠組みや図式をスキーマ (schema) とよんだ。現在は、スキーマは「記憶されている総称的概念を表現するデータ構造で、物、状況、行為、事件、行為や事件の系列を表す。」(認知心理学講座 4、P.15) そのため、レイコフなどの認知意味論が語彙についてのスキーマを言うときと、ラネカーの認知言語学が語と文のスキーマを言うときと、更にテキスト言語学がテキストのスキーマを使うときでは、物、行為、状況とそれぞれ違うが、いずれも対象とするものについての知識であることには変わりがないのである。今回はテキスト言語学を主とすることから、スキーマは主に状況スキーマを指す。そしてテキスト・スキーマはその状況にあるテキストについての知識ということになる。

認知心理学では一貫してスキーマという用語を用い続けているが、言語学で

はスキーマのほかにフレーム、スクリプトの概念があり、それぞれの研究者の立場からこれらの概念を少しずつ偏差をつけて使用してきた経緯がある。言語学でいうフレームはむしろ認知心理学でいうスキーマに近い。フレームと呼ばれるのは、ある中心的な概念、例えば、「誕生パーティ」などについての常識的な知識を含むグローバル・パターンのことである (Winograd 1975)。言語学でいうスキーマは、それに対して、時間的な近接や因果関係にしたがって関連づけられ、一定の順序に配列された出来事や状況からなるグローバル・パターンのことである (Kintsch 1977; Thorndyke 1977; van Dijk 1978; Beaugrande 1981)。スクリプトは、元々「台本」を表し、参加者の役割と彼らに期待されている行為を明示するために使われる安定性のある、定式化された手順をいう。ここではスキーマ概念を認知心理学に従って用いるので、フレームの概念をも含んでいることをあらかじめ断っておく。スクリプトも時によっては用いるが、ごく定式化された手順を表すこととする。

## 2 テキスト種別別テキスト・スキーマ

テキスト・スキーマは基本的にはコミュニケーション場面状況の数だけあり、ほとんど無限といってよい。ここでは Gülich/van Dijk のテキスト種類にしたがって、順序は 1. Gesprächstext (conversation) 2. expliziter Text, 3. narrativer Text としてテキスト・スキーマを論じることにするが、外国語教育に重要だと思われるものに限って、それぞれいくつかの代表的な例を挙げることにしたい。スキーマと外国語教育に必要と思われるテキスト文法を組み合わせで論じる。ドイツ語を中心にし、時として英語の特徴的なテキスト・スキーマと日本のそれを対比させて論ずるが、それ以外に関心のある方はフランス語、その他の外国語におけるそれと通じるところは参考にして、そうでない所は各外国語の場合を自分で調査されることを望むものである。

### 2.1 Gesprächstext (conversation) スキーマ

これにはさまざまなコミュニケーション場面のスキーマがある。論争／討論スキーマ、会議スキーマ、ディベートスキーマ、相談スキーマ、初対面談話ス

キーマ、気遣いのスキーマ、交通事故／過ちを犯したときのスキーマ、レストランのスキーマ等々あげれば数限りない。日本語教育が盛んに行われるにしたがって、日本語あるいは日本人の言語行動についての研究も国内国外を問わず盛んになってきている。スクリプトが決まっているディベートを除いて、対話や討論の仕方について一般的にいわれるのは、ヨーロッパがテニスの的で日本がボーリング的だということである。それが果たして本当か、本当だとしたらどういう発話をいうのか、そのへんを明らかにしてみたい。

日本語と欧米語の違いというより、日本人と欧米人の言語行動の違いを象徴的に表す論争／討論スキーマから述べることにする。

### 2.1.1. 論争/討論のスキーマ

日本大学の木崎氏と共同研究を行って、日本とドイツのテレビにおける討論を比較したことがある。さまざまな討論の場をビデオにとって文字化し、比較した。討論は日本の場合、たいていいわゆる識者のみの討論会がほとんどであった。ドイツでのそれは識者に聴衆が加わるのが多かった。討論会のスキーマ(フレーム)は日本では、司会者と討論者が壇上におり、聴衆は隔てられている場合が多い、今日では、同列の平面に聴衆がいる場合も見られるが、相変わらず討論者と聴衆は隔てられている。それに対して、ドイツでは聴衆が同列の平面にいただけでなく、討論者の間に入ったり、円形に座る討論者を背後で取り囲み直接討論に参加できる形になっているのが多い。したがって、日本の討論会は聴衆を含めた討論会形式の番組を特別に組まないかぎり、普通は識者のみの討論会となる。逆にドイツは、選挙戦の党首討論などの特別番組でないかぎり、普通は聴衆を交えての討論会となる。討論会の初めのスキーマ(スクリプト)は、司会者が識者を紹介し、識者の発言から始まるのは何処でも、いずれの番組でも同じである。しかし進行が微妙な違いをみせる。いわゆるテニスのとボーリング的の違いとそれを支える主張の仕方、Begründung(理由付), Legitimation(正当化)などの Sprachstrategie(言語戦術)である。

2.1.1.1 日本の中で最もヨーロッパ的討論会といわれている『朝まで生テレビ』に焦点を当ててみる。付録1参照。この番組の特徴は司会者が順番に発話をう

ながすというのではなく、自由に発言できる形式をとっていることであり、他の討論会より頻繁に発話交替が行われる。したがって、見る者にとってテニスのあるいはピンポン的と映る。がしかし、意見を聴いていると必ずしもそうではない。テニスのというのは、Aがaの意見を出したら、Bがaの意見に対して反論し、bの意見をいうことである。ところが『朝生』では、「しかし」とか「それはそうですが」と一見、前の人の発言を受け継いでいるがあるいは受け継いでいるように見えるが、発言契機にするための言葉にすぎず、A、B、C、がそれぞれ前の人の発言に関連のないa、b、c、の意見を出している。それはテニスのスキーマではない。その上、一見a、b、c別々の意見にみえたものは最後まで聴くと、意見というより状況説明であったり、同じ意見に対する情報提供や確認、訂正、補充などであることが殆どである。一見ヨーロッパ的討論にみえたものは、実はやはり同じ方向に出し合っているボーリング的であった。それに対してドイツのそれをみてみよう。付録2 参照。各発言の初めと終わりを抜き出してみる。付録2 テキストは、教授が青年達は個々人が覚醒剤などを価値判断し自覚すると言った後に続く部分である。G（中年女性の聴衆）：『音楽グループの演奏を終わってすぐ発言を求めていた者ですが、いまの発言でますます疑問が増しました。[自分の発言の正当化]ここであなた、教授は価値判断ということを口にされました。価値判断を期待するなんて問題じゃない。（中略）まだ百パーセント自己決定できない状態の若者には価値判断はできません』 M（グループ・サウンズの一人）：『広告のたばこについてはどうか』 G：『同じだ』 M：『同じというのはおかしい。強いヤクはやってない。（中略）（われわれのやっている）マリファナとハシシはお酒、たばこと同じなのだ』 G：『それを歌に歌ってないのが問題だ。（中略）あなたのファンはマリファナとハシシから始めて、強いのに乗り換えるのだ』 M：『それは乗り換えヤクじゃない』 各々の発言の初めと終わりを引用してみてよく分かったと思うが、前の人の発言に対して反論する連鎖になっている。ドイツの場合は、Aの意見aに対してBが反論し、bの意見を出す。Cがbに対して反論し、（aを修正した）cの意見を出す。常に意見と意見がかみ合っただ対立をなし、前進して行く感じをあたえる。これがテニスのというのである。

2.1.1.2 また発話 strategy(戦術) のスキーマが違う。ドイツ人にとって、日本人の発話が回りくどいとよく耳にするが、上記で見たように、日本人の発話は相手の発言に対する発言でなく、自分の意見を言うことによって、又は情報提供することによって相手の発言に間接的に否定なり、反対なりを表現する発話態度であることが1つの原因と思われる。しかしまた発話の戦術スキーマ自体が違うのも見逃せない。日本の発話は、「理由」をまず長々と述べて、最後に「結論」を出す。聞いているものは最後まで聞かないと、何を言おうとしているのか分からない。回りくどくなる原因である。ドイツの発話戦術スキーマは、ほとんどスクリプトに近く、一定の構造をもっている。ここで引用する発話は決して識者のものではない。そのへんにどこでもいる青年であり、婦人である。先ず「結論としてのテーゼ」を出し、つぎに「理由あるいは具体的な例」を出して、最後にそのテーゼを繰り返すことで主張の「結論」とする。先の例で見ると、G：『価値判断を期待するなんて問題じゃない。[テーゼ] 一旦ヤクをやれば価値判断を期待するほうがおかしい。[理由]... (省略)... 私も若いときがあり、自分でやったことがあります。[具体例]... (省略)... まだ百パーセント自己決定できない状態の若者には価値判断はできません [テーゼの繰り返し、結論]』となっている。(付録 2) たとえつまらぬ意見でも、聴く者にとっても説得的に響く。こうした発話戦術スキーマは日頃から学校で、家で絶えず繰り返されて身につけたものである。

発言権獲得のための言語戦術 (例：Ich bin dagegen, nach meiner Meinung... (それには反対です。わたしの意見は)/Sie haben recht, aber...

(あなたのおっしゃる通りです。が))やその正当化はディスカッション用の教科書に載っているので、ここでは省略するが、外国語教育において、ディスカッションや対話練習の授業、または意見を発表する際に、発言権獲得の言語戦術と共に、発話戦術「テーゼ、理由／具体例、結論としてのテーゼの繰り返し」のスキーマは役に立つ。特に欧米人を交えた discussion では、これが大切になる。発言権獲得の戦術、その理由付、発話戦術を練習することは中級クラスで可能であるし、必要であろう。が、テニスの意見のかみ合わせ練習は日常的会話の中でも取り入れることができ、初級の段階からでも応用可能である。

### 2.1.2 ラジオ相談スキーマ

2.1.2.1 同じラジオ相談番組なのだが、日本は『人生相談』であり、アメリカは“talk net”（おしゃべり番組）、ドイツは“Ratgebergespräch”（忠告会話）と直訳してみると、それが示すとおり、相談番組スキーマの違いが多少なりとも予測できるだろう。付録 3、4、5 参照。日本ではパーソナリティが先ず客から悩みの内容、家族構成、それを取り巻く諸問題を詳しく聞き出し、その間だまって聞いている専門の先生が最後に相談に乗って、詳しく解決の教えをたれる。（まるで先生が小学生を教えるようである。）アメリカのスキーマは、アナウンサー兼相談役が、客と冗談をいっては、おしゃべりを楽しみながら相談に乗る。しかも肝心の答えは『何処の、何の専門家に相談しなさい』で終わりである。ドイツのスキーマは、相談役の忠告者が客の悩みを聞く。しかし忠告者は聞き出すだけで、こうしろとはいわない。忠告者が質問するうちに、客が自分で解決を見つけてしまう。（これも生徒が自分で教科書を作成するドイツの学校をほうふつとさせる。）（大滝、1993、1996 参照）

2.1.2.2 日本、ドイツ、アメリカの相談番組を、turn taking（発話交替）、interruption（割り込み発話）、back-channel（あいづち）の基準を中心にして比較してみた。（Table 1 および大滝、1993、1996 参照）turn taking の結果はグラフ 1 が示すように、アメリカの数が圧倒的に多く、次が日本で、ドイツのそれは他と比べて非常に少ない。1つの発話が続く秒は、平均すると、アメリカが 8.2 秒であり、日本が 11.9 秒、ドイツが 48.0 秒であった。テキストの経過の中間にいずれも turn taking が多くなるのは、相談番組のスキーマである。アメリカと日本の数が比較的多いのは、interruption とも関連している。グラフ 2 を参照。interruption の数と種類を比べてみると、IT（発話交替するための割り込み）と IO（意見をいうための割り込み）はアメリカが圧倒的に多い、IQ（質問をするための割り込み）と IC（相手の言を確認する割り込み）はアメリカと日本が多い。IF（相手の言を補う割り込み）は日本が圧倒的に多い。IH（ユーモア、茶化す割り込み）はアメリカしかない。全体的にまたどの interruption も少ないのはドイツである。このことから言えることは、割り込んで発言を取り、意見を出すアメリカの対話はテニスのというより、ピンポン的であ

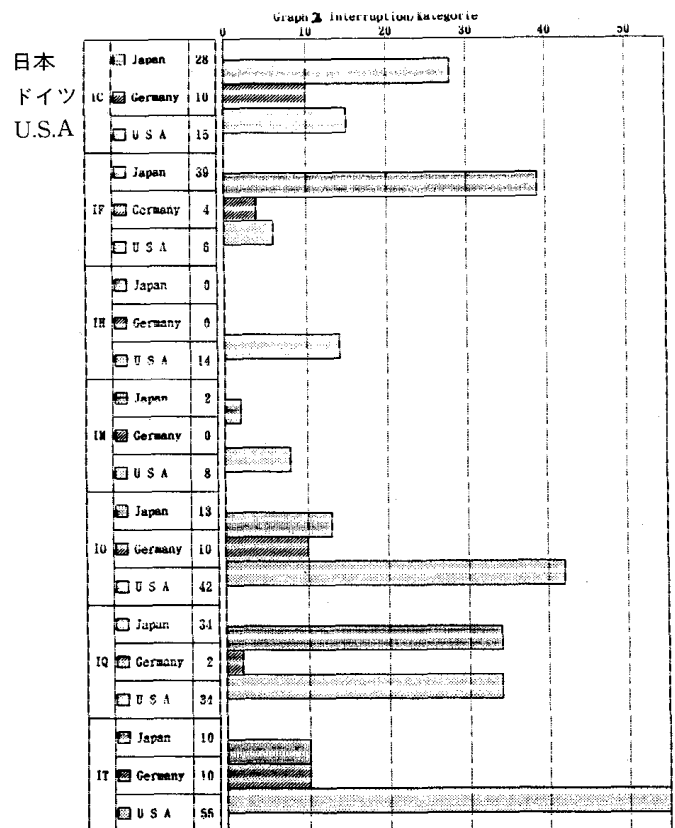
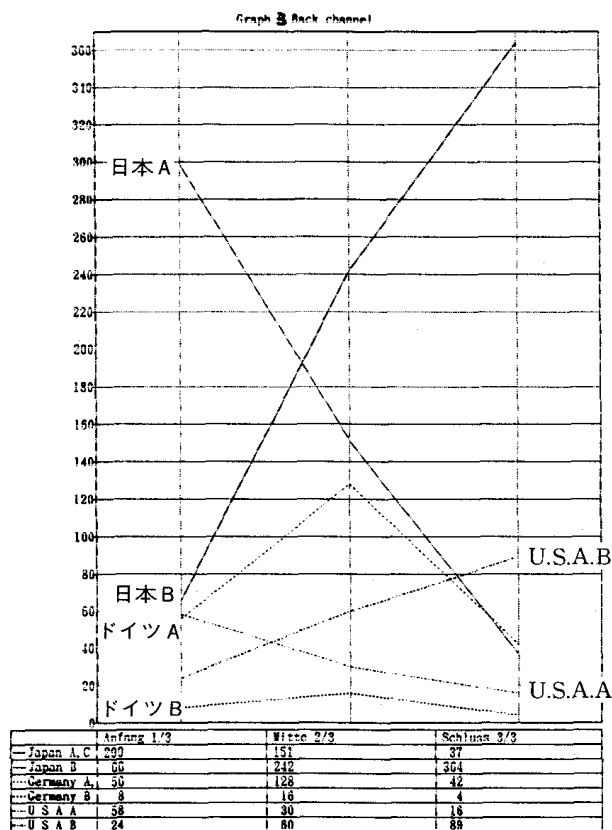
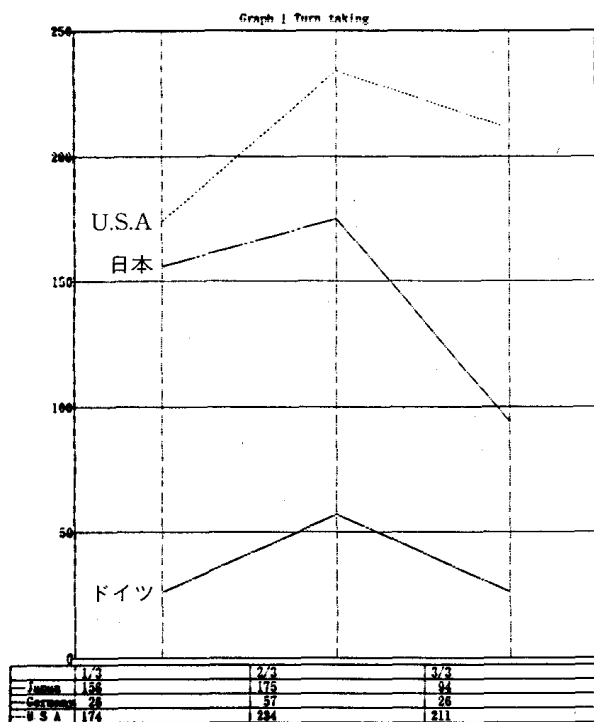


Table 1 Results of analysis (contrastive linguistics behaviors between Japanese, Germany and American conversations in radio)

		Japan	Germany	U S A
	total time number	5140 sec 6 convers.	5109 8 convers	5332 sec 29 convers.
GB	time (average) time of A & B turns interruptions speaking time back-channels	38 sec (3.3 sec) A 21sec, B 17sec A 55.3% B 44.7% 28 0 / 0	22 sec (2.7 sec) A 8sec, D 8sec, B 6sec A/D 72.7% B 27.3% 16 0 / 1 (A1)	218 sec (7.5 sec) A 113sec, B 105sec A 51.8% B 48.2% 102 A 2 A 2 sec 3 (A3)
1/3	time time of A & B turns interruptions speaking time average of time back-channels	1688 sec A 399sec, B 1289sec A 23.6% B 76.4% 156 30 (A27, B3) 801sec (A791s, B10s) A 29sec, B 3sec 365 (A299, B66)	1667 sec A 282sec, B 1385sec A 16.9% B 83.1% 26 4 (A4) 240sec (A240s) A 60sec 64 (A56, B8)	1697 sec A 399sec, B 1298sec A 23.5% B 76.5% 174 38 (A36, B2) 382sec (A373s, B9s) A 10sec, B 4sec 79 (A58, B21)
2/3	time time of A/C & B turns interruptions speaking time average of time back-channels	1688 sec A/C 961sec, B 727sec A/C 56.9% B 43.1% 175 31 (A22, C5, B4) 431sec (A382s, C37s, B12s) A 17sec, C 7sec, B 3sec 393 (A123, C28, B242)	1667 sec A 575sec, B 1092sec A 34.5% B 65.5% 54 20 (A12, B8) 540sec (A468s, B72s) A 39sec, B 9sec 144 (A128, B16)	1697 sec A 866sec, B 831sec A 51% B 49% 234 35 (A27, B8) 253sec (A199s, B54s) A 7sec, B 6sec 90 (A30, B60)
3/3	time time of A/C & B turns interruptions speaking time average of time back-channels	1688 sec A/C 1567sec, B 121sec A/C 92.8% B 7.2% 94 15 (C11, B4) 200sec (C46s, B154s) C 4sec, B 38sec 401 (A3, C34, B364)	1667 sec A 1081sec, B 586sec A 64.8% B 35.2% 26 12 (A4, B8) 424sec (A58s, B366s) A 14sec, B 45sec 46 (A42, B4)	1697 sec A 1204sec, B 493sec A 70.9% B 29.1% 211 34 (A26, B8) 278sec (A203s, B75s) A 8sec, B 9sec 105 (A16, B89)
GE	time (average) time of A/C & B turns interruptions speaking time back-channels	20 sec (3.3 sec) A/C 8sec, B 12sec A/C 40% B 60% 11 0 / 1	86 sec (10.7 sec) D 86sec, B 0 A 100% B 0% 0 0 / 0	129 sec (4.4 sec) A 88sec, B 41sec A 68.2% B 31.8% 23 0 / 0

A= adviser, B= guest, C= specialist, D= Ansager

speaking time, A = the duration A lets a partner speak without his interrupting.



り、相手の言を補ったり確かめたりしながらも、相手の発言をよく聞くのは日本である。ドイツは割り込みを極端に避け、発話交替が少なく、じっくり相手の発言を聞いて、それに答える。ここでも 2.1.1.1 で明らかにしたドイツのテニスの、日本のボーリング的に対して、アメリカの対話はピンポン的といえる。それをまた裏付けるのが、back-channel (あいづち) である。グラフ 3 参照。日本の「あいづち」は、平均して 4.8 秒に 1 回、アメリカが 18.3 秒に 1 回、ドイツは 19.9 秒に 1 回であり、日本は極端に多い。相手の発話のほとんど句毎にうなづく感じである。例えば、B『主人の、結局、持ち物の中から、』、A『ええ』、B『そのお、

女性から頂いた』、A『ええ』、B『てがみーとか』、A『ええ』、B『後何か、頂いたプレゼントみたいな』、A『ええ』、B『のとか』、A『うん』、B『そうゆうのが、あのう』、A『出てきた』、B『ええ』、A『うん』という具合に、「あいづち」のみならず、「割り込み発話」でさえ、相手の発言を補うものが多く、相手の発話に合わせた相互行為である。お互いの意志疎通を確認し合っただけのコミュニケーションである。「あいづち」がいずれも、テキストの前半に A (パーソナリティ) が多く、後半に逆に B (客) が多くなるのは、当然のことながら相談テキストのスキーマである。しかし、ドイツの A, B に注目して欲しい。A は前半より後半に少なくなるのは当然ながら、B が日本やアメリカよりはるかに少ないことと、何よりも、前半も後半も少ないことである。これは、ドイツ人の言語行動が、相手の発言に賛成しないかぎり、あいづちをうたない相互行為でなりたっているからである。と同時に、相談テキストでは相談役が解決を教え諭すのではなく、客が自分で解決を見つけ出すことからくる結果なのである。あいづちのないコミュニケーションは、お互いの意志疎通を確認し合っただけのコミュニケーションに慣れているわれわれ日本人には、そっけなく感じられ、親しみが沸かないが、ドイツ人にはそれほどそっけなく感じられるわけではない。むしろ、われわれが賛成でもないのにあいづちをうつと、賛成していると誤解されるから、気をつけなければならない。また以前の論文で指摘したように、ドイツ人は普通の対話や会話で、発話交替のとき、2秒の間隔が空いたら耐えられない。その場が、重苦しい雰囲気になってしまう。アメリカのピストルの会話になれた人達にも同じだろう。ドイツ外国人教師が日本に来て何よりも耐えられないのは、学生に発言を求めたり、質問しても、すぐ答えが返ってこないことである。答えられなくても、言葉で何らかの反応を示さなければ、ドイツ人は無視されたと思ってしまう。イギリス人も同じだと聞いている。

そういったことも外国語は配慮して教育しなければならない。

### 2.1.3 研究発表のスキーマ

欧米の学会やゼミナールでの研究発表は、まず初めに、発表のテーマとその意義を述べ、発表構成を提示しておく。内容構成は、1 背景、目的 2 方法 3

結果 4 結論 と論文スキーマと変わらないので、2.2 の項で詳しく論じることにし、ここでは省略することにするが、発表の目的とその意義を明確に主張するところは、日本と違う点である。大きな学会発表は、分科会と全体セッションから成り立つのが普通であるが、いずれも質疑時間はたっぷり取って、実質審議をする。休憩時間も審議の場となるのは日本と同じである。ゼミナールや分科会は発表が討論のきっかけを作る機能をもつだけの感がある。したがって、参加者は討論するために参加するので、無口な日本人参加者は何のための参加かときかれる。いずれにしても、疑問は徹底的に追及される。学会ではないが、金沢大学の提携校であるジーゲン大学（ドイツ）でのことである。教授招聘のための発表会があった。認知心理学、社会学、文学、芸術学等の学際分野の文学科学で教授を外部から招聘する時のことである。教授は文学心理学の分野での有名人であった。私は教授の発表会は儀礼的なものだとばかり思っていたら、さにあらず。教授の発表があり、質疑応答が長時間繰り返された。投票の結果教授の招聘は取りやめになった。

外国語教育における発表の指導、質疑応答の重視など考えるべき点は多い。

#### 2.1.4 ディベートのスキーマ

ディベートには大統領選挙などのTVディベート、議会でのディベート、法廷のディベートなどがあるがここでは法廷などいわゆる「ディベート」とよばれ、スキーマがスクリプト化していて、その構成が決まっているものを取り上げる。TVで一頃流行ったうっちゃん・なんちゃんの『さくらふぶき』の番組でおなじみのように、法廷でのディベートが基本である。ディベート・スキーマはテーマを決め、賛成側、反対側の2組に分かれる。<sup>註1)</sup> 発言交替の構成(スクリプト)は、1 肯定側立論、2 否定側質疑、3 否定側立論、4 肯定側質疑、5 否定側反駁、6 肯定側反駁、7 否定側反駁、8 肯定側反駁 となっている。違反発言の規則も決まっている。時間を守ることや相手の発言を曲解してはならないなどである。戦術としては：主張に根拠を伴うこと。根拠付けは論理的理由付または証拠資料の提示などである。発言内容のナンバーリング・ラベリングを適確に行うこともその1つである。

これは日本語でのディベート教育の一例として興味深いし、外国語教育においても同様な応用が可能であろう。

#### 2.1.5 日常生活のさまざまな場におけるスキーマ

テキスト・スキーマの他に、ある言語圏にはその言語に特有な文化の常識といわれる部分テキスト・スキーマともいうべき日常生活のスキーマがある。例えば、ドイツには、食堂であろうと、授業中であろうと、大きな音をたてて鼻を咬んでもよいが、クシャミをしてはならないとか、スープをすすったり、音を立てて食事をしてはいけないなどである。そういうスキーマをいくつか上げておく。

挨拶は、当然ながら、“Guten Morgen”とか“Guten Tag”を言うが、その後“Herr Tanaka”と姓を呼ばねばならない。親しい友人なら、名前の方を呼ぶ。握手をするが、注意を要する。学生が教授など目上の人に先に手を差し出してはいけない。男性は女性が手を差し出して初めて握手ができる。初対面では、年齢とか、独身とか私的な話題は避けて、一般的な話題を選ばねばならない。プライベートな話題は親しくなってからである。いつから“du”(親称)で呼び合うかが大きな問題である。子供同士、または子供に向かっては“du”で呼び、子供は大人に向かって“Sie”(疎遠称)で呼ぶ。1970年代学生運動があった時から、学生と教授はみな“du”で呼び合った。しかし保守化が進んだ今日また教授は学生を“du”で呼び、学生は教授を“Sie”(疎遠称)で呼ぶ地域が多くなってきた。1970年代に女性は大学生の年齢になると、結婚と関係なく、Fräulein(=Miss)ではなくて、Frau(=Mrs)を付けて呼ばれるようになったが、これは女性解放運動と関連して、そのままである。

招待を受けたら、時間に気をつけなければならない。午後4時なら、お茶に招待である。たいてい手作りのお菓子が用意されている。夕方8時なら夕食は出ない。夕食を出すときは、たいてい6時頃の招待となる。7時頃の招待のときは夕食が出る出ないを前以て伝えられる。時間前に到着してはならない。用意が整っていないことがあるから、迷惑となる。招待には花を持参するのが習わしであるが、手作りのものが最高に喜ばれる。菊はお墓の花なので持参して

はいけない。持参品は必ず、『誰々さんに』といって渡す。さもないと誰にくれるのかと問われる。夫婦といえど持ち物は区別しているからだ。家族全員が紹介される。子供も幼児も同等である。子供の良いところを紹介して、たいてい子供を誇りに思っているという。招待されると、まず台所やWCなど家の中すべてを案内される。友人待遇としての証明である。手作りを最高に尊重することから、手作りの椅子や壁掛けなど自慢するし、客も褒めるのが礼儀である。食事の前に、飲物が出されるが、コーヒーがいいか紅茶か聞かれる。客は「どちらでもよい」とは言わない。ミルクは？、砂糖は？と1つ1つ聞かれるが、ja, nein をはっきり答える。料理は招待した者が用意する。教授に招待された時のことである。料理は教授が作り、奥さんは手伝いはするが見ているだけだった。奥さんに招待されると、もちろん逆になる。食事は客から先に手をつける。客が終わらないと、次の料理に移らない。遠慮はもちろん不必要である。客は料理のよいところを見つけて褒めるのが礼儀である。かといって過度に褒めるといくらでも勧められるから要注意である。子供は研究の話など子供に関係ないときでも、大人の話を黙って聞いている。食事が終わっても、話は続けられる。子供は自分の部屋に退いてよいか、断ってから退席する。食後はたいてい居間に移り、話は続けられる。客は12時前に帰っては、失礼になる。

夫婦または恋人同士は毎日『愛してるよ』と愛を確かめ合う。旅行などで家を離れたら、毎日手紙を書かないと、音信不通は不安材料になる。

ハンカチは鼻を咬むためのもので、汗ふきではない。

レストランではテーブル毎にウェーター／ウェイトレスの受け持ちがあって、受け持ちでない限り、注文は受け付けてもらえない。側を通るウェーターに“Herr Ober!”と呼びかけても、係でなければ“Mein Kollege kommt (同僚が来ます)”と言って取り合わない。料理が塩が効き過ぎていたり、冷たかったら文句をいって作り直してもらえる。支払いも受けもちのウェーターにする。サービスが悪ければ、チップをやる必要はない。12.50 DMなど半端なときは“13 DM bitte!”といって区切りのよいところで、端をチップにする。釣銭の返し方はウェーターだけでなく一般に変わっている。小銭がなくて、15 マルクを渡すと、“14、15”と言いながら、1 マルクつつ返してくれる。

買い物はスーパーは別として、市場で野菜や果物は自分で選べない。選ぶものなら、“Mensch!”(畜生)といわれて、手が払いのけられる。売り子に任せて、言葉で注文しなければならない。肉屋やパン屋など店に入ったら、先に来ている人を覚えておいて順番を待たねばならない、順番がきたら、もたもたせず、素早く注文しなければならない。入るときも出るときも、挨拶は欠かしてはならない。日本では、買いものをしたあと、店員が『ありがとうございます』と言っても、黙って帰るのが習慣だから、これには注意が必要である。たとえ旅行客でも、買い物をして帰るときは“Auf Wiedersehen”を忘れてはならない。さもないと失礼になり、礼儀知らずと見なされる。

電車やバスなど交通機関は、車掌はおらず運転手も改札しない。各自の責任に任せられている。自分で切符を自動改札機で改札しなければならない。無賃乗車もいるが、私服の検札員に見つかったら5千円は覚悟が必要だ。旧東ドイツ、チェコ、ポーランドなど旧東地域では、社会主義時代の習慣から無賃乗車が多く見かけるが、外国人には厳しいそうである。

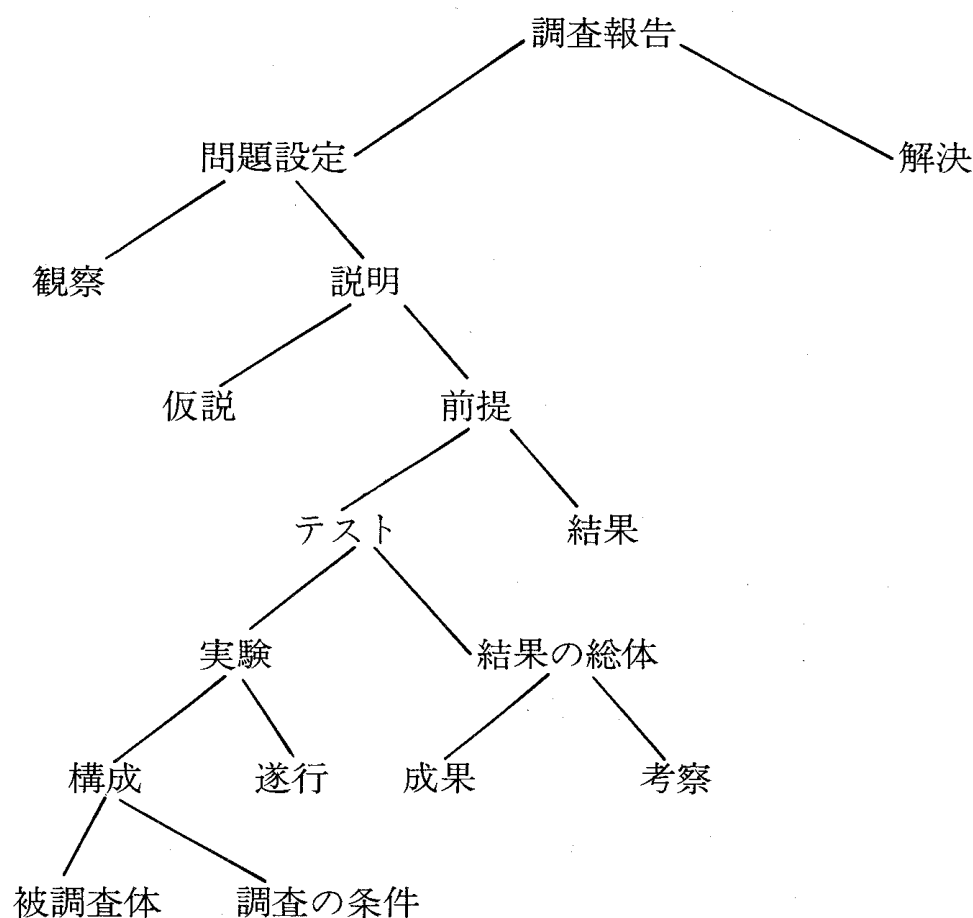
以上、いろんな場のスキーマを自分の経験に基づいて述べたので、時代や地方が異なれば、違うところがあるかもしれない。しかしだいたいにおいて、ドイツ全体に通用するスキーマであり、それらの幾つかはアメリカおよびイギリス、フランスなどに通用するスキーマでもある。外国語教育に携わる人達は、これらのスキーマを契機に教える外国語圏の地域のそれを意識して比べてみてほしい。

## 2.2 Expliziter Text (明示的テキスト) のスキーマ

明示的テキストには科学論文、新聞、実用書、専門書、広告等(文学テキストを除いたすべて)の書き言葉のテキストが入る。以下はこれらのいくつかを取り上げて論じることにする。

### 2.2.1 論文スキーマ

2.2.1.1 科学論文スキーマについては、van Dijk (1980) が「スーパー構造」としての「科学論文構造」を次のように表している。(p 151)



これは我々の知識の中にある構造とはいえ、論文の流れが見えにくい。むしろ J. Swales “Genre Analysis” と日本人の英語と欧米人の英語に見られる医学論文の相違（大滝祥子、1992、1995、1996）が参考になるだろう。

#### 2.2.1.2 論文全体のスキーマ：

論文全体のスキーマは、1 導入 (introduction)、2 方法 (method)、3 結果 (result)、4 検討 (discussion) であり、これは東西共通である。しかしその記述の仕方に相違がある。全体的にいて、欧米人のコミュニケーションはまず説得を目的とし、書き手は自己責任的な記述の仕方をする。言い換えれば、書き手あるいは話し手は明快に秩序だった論旨を展開することを求められる。それに対して、日本人のそれは客観的事実を述べるだけで、読み手あるいは聞き手の方が、書かれたあるいは話されたことを察して理解することが求められる。そういうローコンテクスト文化とハイコンテクスト文化のコミュニケーションの普段の在り方が反映するものと思われる。以下は順序に従って述べることにするが、論文全体のスキーマは abstract とほぼ同じに考えてよい。



### 2.2.1.2.1 Abstract (抄録) :

論文の最初に付される abstract は外国の研究誌は理科系、文科系を問わず付するのが普通で、ドイツでのそれは、本文がドイツ語でも英語で書かれるようになってきている。査読のある研究誌なら非常に重要な部分となる。投稿数の多い研究誌ならこの部分だけで勝負する事になる場合が多いからなおさらである。(論文内容自体が悪くないにもかかわらず、採用されなかった論文はこの部分が欧米のスキーマに合っていなかった場合が多いと聞く)。典型的な abstract のスキーマは次のようになっている。1 背景、目的 (background, purpose) 2 方法 (method) 3 結果 (result) 4 結論 (conclusion)

これは論文に限らず、レポートにも通ずるスキーマであり、上記の論文全体のスキーマを反映していることは当然である。これも東西共通であろう。しかし 1 と 4 については特に注意が必要である。次の動詞の使用度の表 2 と 3 が表すように、日本人の abstract では、論文の最初で、自分の研究の背景とし

表 2 各医学雑誌 abstract におけるスキーマ別動詞数

	Internal Medicine	Japanese Journal of Physiology	The New England Journal of Medicine	The Lancet
背 景	11 ( 7.1%)	2 ( 0.9%)	63 (18.2%)	56 (21.1%)
方 法	39 (24.8%)	43 (19.2%)	72 (20.8%)	72 (27.1%)
結 果	79 (50.3%)	135 (60.3%)	164 (47.4%)	89 (33.5%)
結 論	28 (17.8%)	44 (19.6%)	47 (13.6%)	49 (18.4%)
計	157	224	346	266

(大滝祥子, 1993, P 32)

表 3 各医学雑誌 abstract における時制別動詞数

	Internal Medicine	Japanese Journal of Physiology	The New England Journal of Medicine	The Lancet
現 在	37 (23.5%)	57 (25.4%)	83 (24.0%)	82 (30.8%)
現 在 完 了	5 ( 3.2%)	2 ( 0.9%)	12 ( 3.5%)	11 ( 4.1%)
小 計	42 (26.7%)	59 (26.3%)	95 (27.5%)	93 (34.9%)
過 去	113 (72.0%)	164 (73.2%)	233 (67.3%)	168 (63.2%)
過 去 完 了	2 ( 1.3%)	1 ( 0.4%)	18 ( 5.2%)	5 ( 1.9%)
小 計	115 (73.3%)	165 (73.6%)	251 (72.5%)	173 (65.1%)

(大滝祥子, 1993, P 33)

て、それが他の研究に比してどのような重要性をもつもので、どのような意図、目的で行われたものであるかをしっかり現在形で述べるのが少ない。また研究結果の部分が極端に多いことと過去形が多いことは、研究結果を客観的に述べるだけで、研究結果の意味、研究成果と何よりも研究の意義を読者の理解にまかせる記述の仕方を反映している。ハイ・コンテクスト文化の日本ならそれでようだろうが、ロー・コンテクスト文化では通用しない。結論部分は研究成果と自分の研究の意義を明確に記述することが肝要なのである。この abstract のスキーマは論文全体スキーマに通じることを再度、強調しておきたい。

#### 2.2.1.2.2 Introduction (まえがき/序論):

abstract のない論文は introduction がそれに代わるので、前項を参照すればよい。したがって、ここでは abstract を付した論文についての introduction について述べることにする。この部分も日本の論文では過小評価されがちで、論文を書くに至った動機とか背景を述べて終わりというのが多い。しかも日本の論文に多い動機としての背景とは異なって、introduction の背景というのは、同じ主題に関するこれまでの先行研究のことである。abstract の機能は論文全体の重要な部分を正確にまとめることにあるのに対して、introduction の機能は当該分野におけるこれまでの研究の流れのなかでの位置付けをすることによって、当該論文の重要性を際立たせることである。introduction のスキーマは次のようになっている。

1 Known (genaral topic) 2 Unknown (specific topic) 3 Question 4 Experimental approach (Swales 1990)

1 は領域の設定のために、当該分野の主題に関して従来論じられて来ている一般的な説を挙げることである。2 でそれらの説に論じられていない、あるいは従来とは違う主題の特殊化をする。それによってこの研究の目的と重要性を認識させるのである。3 は特殊化された主題に従った問題設定を行う。4 で問題設定を解決する実験または方法をのべて序論は終わる。introduction は幅の広い視野から狭い特殊性へ導入するジョウゴのような形になっているのが特徴である。

#### 2.2.1.2.3 conclusion (結論) 部:

この部分は abstract の conclusion で述べたように、日本人の論文は客観的結果または実証を示すだけのものが圧倒的に多い。欧米人の論文は結果に基づく先行研究との比較検討が十分なされている。これは極めて重要なことである。検討の記述は確かに慎重になされなければならない。しかし日本人の論文のように論議を抜きにした事実のみの記述は読み手に任せた、一見中道的方法と見えるが、欧米人からみれば、不十分な記述と受け取られても仕方がないことを心得ておかなければならない。最後に introduction で提示してある研究の重要性を再度提示して、研究の意義を明確にすることも重要である。

以上の論文スキーマは外国語教育に応用する場合、特に論文作成にはなくてはならない。abstract 部分はレポート作成にも応用できる。外国語の研究雑誌は abstract を読めば大体論文の内容が分かるようになっているし、論文全体構成も知識としてもっていれば、外書購読にも役立つであろう。

## 2.2.2 新聞報道スキーマ（文芸欄、家庭欄、社説等の解説を主とするものは別の項）：

新聞報道スキーマは改めて述べる必要がないほど明確である。日本、ドイツ、英語圏のどの新聞報道も「見出し」「リード」「報道」の部分からできていることはいうまでもない。しばしば「リード」の部分が欠落したり、場合によっては「小見出し」になっていることもどの国でも同じである。ただ時制が日本語と欧米語では違うので、多少のスキーマの違いが出てくる。欧米語には現在完了、過去完了があるが、日本語にはないからである。「見出し」の部分はいずれの語も現在形または名詞、体言止めになる。「リード」の部分で欧米語はしばしば現在完了が使われて、過去形に移行する。日本語は過去形となる。「報道」の部分はいずれも過去形である。時制は、現在形、現在完了、未来形が「話し合いの時制」であって、直接係わりをもって聞くまたは読むことを示唆する。それに対して、過去形、過去完了、接続法（条件法）は「語りの時制」で、客観的な出来事を係わりないものとして、余裕をもって聞くまたは読むことを示唆する。「見出し」が現在形またはそれが省略された体言止めになっていて、「報道」部分は過去形になっていることも納得がいくことである。

「リード」の部分で欧米語が現在完了を用いるのは出来事が過去の時点であることを示して、ワンクッションおくのである。一旦時点が過去に移行したらまたは直接係わることを示唆する必要がなくなったら、あとは過去形を続けるのである。そのさい「報道」の部分でも、現在形が使われることがある。それは記者の解説またはコメントである場合がほとんどである。「報道」の内容記述スキーマは、4W1H、「誰が」「何時」「何処で」「何をした」であり、その順序はほぼ東西共通である。

新聞報道スキーマは、構造が明確であるので、それを外国語教育に応用できるのは言うまでもない。また日本語にない現在完了を含めての時制への配慮、さらに報道と記者のコメントのテキストの浮き彫りなどの読解指導が可能と考えられる。

### 2.3 Narrativer Text の スキーマ

narrativer Text の代表的なテキストは、物語テキストである。これに類するのは、文学作品一般であり、筋をもつ作品は短編、長編を問わず小説が入り、推理小説も入れられる。しかし文学作品は作家独自の個性と作品構成を有するがゆえに、同一のスキーマは考えられない。同一でないことが文学作品の文学作品たるゆえんである。それにもかかわらず認知心理学は早くから物語スキーマに着目した。というより物語スキーマから言語理解と再生にはスキーマが働くことを見いだしたことは既に述べたとおりである。認知心理学の明らかにした物語スキーマは表4のとおりである。(認知心理学講座2, 182-187)

Thorndyke は、物語の構造の規則性を物語文法によって表現し、それをもとにした記憶や理解のモデル、すなわち物語スキーマを提唱した。この表は『物語文法の書き替え規則である。規則(1)はすべての物語は必要条件として「設定」、「テーマ」、「プロット」、「解決」の四つのカテゴリーから構成されるというものである。規則(2)以下はこれらのカテゴリーがさらに細分化されることを示す。まず設定は登場人物、場所、時間から成る。テーマは後続のプロットに枠組みを与え、主人公により達成されるべき目標を含む。プロットは無数のエピソードの連続であり、それぞれは下位目標とそれを達成するための試行とその

表 4 物語文法 [Thorndyke, 1977]

規則番号	規	則
(1)	物 語	→ 設定+テーマ+プロット+解決
(2)	設 定	→ 登場人物+場所+時間
(3)	テ ー マ	→ (事件)†+目標
(4)	プ ロ ッ ト	→ エピソード†
(5)	エピソード	→ 下位目標+試行†+結果
(6)	試 行	→ { 事件† エピソード
(7)	結 果	→ { 事件† 状態
(8)	解 決	→ { 事件 状態
(9)	下 位 目 標 } 目 標 }	→ 理想状態
(10)	登 場 人 物 } 場 所 } 時 間 }	→ 状態

† は任意の要素

結果とからなる。規則 (6) は試行がさらに下位目標を生み、エピソード全体を含む場合である。最後に解決は物語の最後に起こり、テーマに対応して目標の達成や主人公の反応から成る。』(認知心理学 2、p 181) Thorndyke は実際の物語『サークル島』に上記の書き替え規則を適用してプロット構造を得て、34 個の命題を 4 つのレベルに分け、被験者に物語を呈示した後で再生を求めた。結果はレベルの高い位置にある命題ほど再生率が高かった。またテーマの呈示を (a) 物語の本来の位置である最初、(b) 最後の位置、(c) 無提示、(d) 時間系列順序や因果関係なしにエピソードを呈示して、読ませた後の再生率は、(a) (b) (c) (d) の順序に低下した。これは物語テーマが存在していることの重要性和、それが最初に呈示されることの必要性がよくわかる。つまりテーマと高レベルの命題ほど確率の高い物語スキーマを形成していることになる。Kintsch は物語のマクロ構造つまり筋の流れとしてのスキーマを『シモーナ』物語でみている。表 5 参照。(認知心理学 2、p 186)

しかしこれらの物語スキーマは物語にのみ当てはまるというわけではない。他の文学作品は元より、Graesser [1978] は『魚の釣り方』のような手続きに関

表5 “シモーナ” 物語のマクロ構造 [Kintsch, 1977]

[エピソード I]:	
[起 I]:	
シモーナとパスキーノは恋人同士である.	(1)
[承・転 I]:	
[エピソード II]:	
[起 II]:	
ガーデンパーティー	(2, 3)
[承・転 II]:	
パスキーノがサルビアの葉で歯をみがき, 息絶える.	(4, 5)
[結 II]:	
シモーナがパスキーノ毒殺の罪で訴えられる.	(5, 6, 7)
[エピソード III]:	
[起 III]:	
裁判官はシモーナに [承・転 II] を再現するよう命じた.	(8)
[承・転 III]:	
シモーナはサルビアの葉の毒にあたった.	(9)
[結 III]:	
サルビアの繁みの下から, 1 匹の毒ガエルが見つかった.	(11, 12, 13)
[結 I]:	
恋人達は死して結ばれた.	(10)
[教訓]:	
幸いなるかな二人の魂よ.	(10)

右欄の ( ) 内の数字は物語中の段落を表わす.

する説明文にも、設定、テーマ、プロット、解決の四つの要素がそろっており、物語文法が物語以外のテキストにも当てはまることを指摘し、物語スキーマ独自のものとはいえないとした。しかし、私は物語スキーマはあると反論したい。物語スキーマには、それを取り囲む枠が『七日物語』のように語り手が物語に入る前に説明する場面は「話し合いの時制」が使われ、物語は「語りの時制」で語られる。それも物語が始まる合図の「昔々」(Es war einmal ein .../ Once upon a time...) と物語が終わる合図「めでたし、めでたし」(Wenn sie noch leben, sehen Sie sie) があるのも重要な物語スキーマを形成している。『魚の釣り方』のような説明文には「語りの時制」は使われず、「話し合いの時制」が優勢を占めることが物語スキーマと違うところなのである。四つの要素と「語りの時制」が物語スキーマを形成する。そして大抵の文学作品には物語スキーマが通用するのである。

文学作品を教育に取り入れる場合は、注意が必要である。物語スキーマがど

の文学作品にも応用できるとはいっても、文学に限らず美術、音楽等の芸術コミュニケーションでは、美的テキストのもつ機能が、他のコミュニケーションのテキストと違って、解釈の多様性を基本とするので、単価的読解を強要することはできない。スキーマは骨組みを表すのみである。しかし、概念として提示することは学生の理解に役立つと思われる。尚、文学作品を教育に取り入れることに関しては、拙論『言語教育と文学教育』を参照されたい。

### 3 結び

以上、明示的テキスト、語りテキスト、談話テキスト、および日常的場面のいろんなスキーマを述べて来た。がそれはありとあらゆるコミュニケーションからすれば、ほんのひとにぎりにすぎないことは勿論である。しかし少なくとも、欧米語とそれに基づく生活のスキーマの特徴を挙げることができたのではないかと思う。

これらの個々のスキーマを実際の授業の場でどのように扱うかについては、今回は言及しなかった。『認知心理学に基づく外国語教育』で、すでにおよそのスキーマの外国語教育への応用を述べてあったので、それを参考にして今回記述したスキーマについては個々人で応用を試みてほしいものである。

また今回は日本と異なるスキーマのみを述べたが、それを意識してコミュニケーションができなくなることは、もちろん私の意図ではない。スキーマなど意識しないでコミュニケーションしてみるのが、まず大切である。コミュニケーションはむしろ異なるスキーマを持ちながら、共通性を探るところに成立する。しかし前提としての差異の認識は欠かせないものである。外国語教育はそのあたりを考慮して、スキーマを教えながら積極的なコミュニケーションの指導を心しなければならない。たとえ読解であれ、作文であれ、外国語を使用する場は異文化間コミュニケーションであることを意識させることが重要である。外国語教育はそのことも常に念頭において行わねばならない。そのためにこの論文が少しでも貢献できたらと願うものである。

---

注1：これは高校ディベート選手権による。北信越支部長は金沢大学文学部神谷浩夫氏である。

## 付録1：日本のTV討論

『朝まで生テレビ』テーマ：自衛隊

A：それじゃ、あたしからですネ、何故、PKO法が必要であったかという基本的なところを簡単にですけれども申し上げさせて頂きたいと思うんです。アノ世界でデスネ、この国連の平和維持活動というのが注目、初めて注目された。エ、アー、一般の人に注目されたのは1989年にこれがノーベル平和賞を貰ったということでデスネ、エー注目をされたわけです。

B：違うと思う。

A：そうです。

B：日本の国民がそんなことで注目していないヨ。

A：いや、ですからネ

B：やっぱり、そりゃ湾岸戦争ですヨ-----中略-----

B：湾岸戦争。

A：いや

B：全然違う

A：いや

B：問題のすり替えだヨ、そりゃ。

A：いや、そうなんです。

B：湾岸戦争で初めて、

A：ノ、ノーベル平和賞を貰ったということでアノー私達は注目したわけ  
です。

B：ウソだヨ、ウソだヨ。

A：でそうなんです。

B：Aさん、そういう白々しい・・・ 違う、じゃ僕が解説するヨ

？：・・・

A：で、ですネ・・・

B：ちゃう、ちゃう、ちゃう

A：ちょっと聴いてくださいヨ

B：そんなこと言ったら全然違う。

A：いや、ちょっと聴いてください。  
ちょっと聴いてくださいヨ。

B：そりゃネ湾岸戦争でやっぱりアノー、エー、ネ、アー多国籍  
軍に日本が協力しなきゃいけないと、どうするかというところから始めるんですヨ。

A：法案を

法案を、ちょっと待って下さい。法案を作成しなきゃならないんです



-----  
B：つまり、Aさんは・・・

C：                     そこが自衛隊の基本的なところなんです。

B：Aさんは事実上、事実上っていうより自衛隊を変えたということですね

C：自衛隊法は変わっているんです。

A：自衛隊法は改正しているわけです。

C：                     改正しているわけですね。

A：エー、国連、アノ、国連平和維持活動協力法案の、エ、中で自衛隊法の改正をきちんとやっているわけですから。自衛隊法を改正して任務を付け加えているわけです。この点誤解しないで下さい。

C：待って下さい。いやーネ、いや国会では議論をさんざんされたと思うけれども一般のこれを見ているお客さんは分かりません。だから今までの自衛隊は海外へいけなかったけども、自衛隊法を改正して今度は行けるようにしたんだとこういう話ですか？

A：明確にしたわけです。

(木崎氏の文字化より)

付録2： 教授が学校向けの麻薬防止のパンフレットと映画を作成した。制作者の2人が登場していて、映画を上映し、司会が2人にお話を聞いた。また「アカブルコ」（覚醒剤の商品名でもある）というグループ・サウンズが覚醒剤の歌を歌った後、話に加わり、スタジオの観客から質問や意見が出ているところである。Lは司会、Gは観客年配の女性、Mはグループ・サウンズの1人である。

G: グループ・サウンズの演奏が終わってすぐ発言を申し出た者ですが、疑問が益々沸いて来ました。ただ今は、あなた、教授は価値判断について口にされましたが、わたしには、一旦ヤクをやれば、価値判断を期待するほうがおかしい、と思われます。結果は決まっています。価値判断はわたしには全く違うカテゴリーです。グループ・サウンズの演奏が終わってすぐ思いました。ここにいる若者が、グループ・サウンズの演奏をきいて拍手喝采する気持ちがよく分かります。面白がって一緒に熱狂していますね。私がぞっとしたのはこの音楽家たちが投げかけた疑問です。このような演奏を聴いてすぐ、『あなたの場合はどうでした。あなた達はどうでしたか。あなた達は何をしましたか』とたずねられたら、何とお応えしますか。あなたのお話しは、私にはあなたも同じことをなさったと聞こえます。沢山の若者の耳には、まるで『試してごらん』『飲んでみてごらん』と宣伝しているようです。（拍手）そ、そ、それははっきりしていて間違いありません。私も若いときがありましたし、自分でやったことがあります。私達も試したことがあるのです。私も初めは煙草を試して、『いけねえ』とか『いけるー』とかいって、そのまま続けたりして。。。マルクス、マ

L: マルクスさん、すぐ簡単にお答えねがえますか。時間がありませんので。

M: ええ。  
G: いや、一言だけいわせてください。私達はそうやってきたのです。今もそうやる人達がいるに違いありません。そんな人達には...まだ百パーセント自己決定できない状態の若者には価値判断はできません。

M: ええ、しかし。。あちこちにある広告のたばこの宣伝についてはどう思いますか。お酒の宣伝は？

G: まさに同じです。まさに同じです。

M: 同じとおっしゃるのは、おかしい。ちょっと待ってください。私個人の経験から知っているのですが、簡単にやってしまうんです。ここだけの話ですけど、簡単にジョイントを吸う連中を知ってます。それは強いやつです。そんなのは避けてますよ。われわれはみんな、みんな強いやつはやってません。いつもハシシュとマリファナは他の強いやつと一緒にされていますが、このパンフレットもそうです。マリファナとハ、ハシシュを酒と同一に論ずるなら、もう少し分かりやすくなると思いますよ。（拍手）

G: もう一言いっていいですか

L: 他に誰か手を挙げていた人がいましたよ。

G: 一言だけ。問題はそれをあなたは歌の中でいってないことです。もしあなたの若いファンがあなたの歌に熱狂的に従ったら、どんなに多くの若者が半年、1年いや2年、やくに浸かるのだから、はっきりいってあなたに責任がありますよ。（笑いが起こる）少なくとも二・三人はね。

L: 手短に願いませんか。どうか。

G: ええ、彼らはマリファナやハシシュから始めて、より強いのに乗り換えるんですよ。

M: これだけは言いたいんだけど。それは全然乗り換えヤクではありませんよ。なぜヤクだけが問題になるの。お酒も、たばこもやめてくれ。ハシシュも必要ないさ。必

L: お、おう。

## 付録3：人生相談（日本）

1. (A=相談係、男性、B=客、女性、28才、3年前結婚、主婦、子供2人、C=心理学者、女性;テーマ=27才の夫の浮気)

(ベル)

1 A (男性)：はい、人生相談の係です。どうぞ。

2 B (女性)：ええと、私は今28なんです。はい で、主人が27才です。 で、子供が  
A： 28才 はい はい

B：2人。 います。 それで、 あの今日ちょっとお聞きしたいのが 主人に女性関係

A： ええ はい ええ はい

B：なんですけれども、 あのう、2人目が生れて、まだ間もなく、そんなに分かっていないん

A： はい

B：ですけれども

3 A： ああそうですか、なん、何カ月ですかお子さん

4 B： 3カ月です。

5 A： あ、下がね？

6 B：はい

7 A： それで上は

8 B： と、3才です。 はい

9 A： 3才 ご主人の仕事は？

10 B： と、建設関係の仕事です。

11 A： あ、建設関係

ね。それであれですか、あの、まだ4年もたっていない子供さんが2人。ね、

B： はい

A：可愛い盛りがいるのに、女性関係が、 できたんですか。 はい

12 B： ええ はい 主人の、結局、持物の

B：中から、 そのお、女性から頂いた 手紙一とか 後何か、頂いたプレゼントみたいな

A： ええ ええ ええ ええ

B：のとか そういうのが、あのう ええ で、内容が 結局主人を信じて、

A： うん 出て来た うん うん

B：いますっていうような内容なんですよ？ それで、そういうことを書くっていうことは、

A： ええ

B： やはり、ちょっと普通の関係じゃないんじゃないかって、 私が思ったもので、

A： うん うーん うーん

B：で、あの、聞いたんです。 けれども そしたら、それは、勝手にその子を書いただけで

A： ええ うん

B：だけであって、 別に何の関係もないって

13 A： うん 何の関係もないって ううん

14 B： ええ ですけど、あのう、

## 付録4 : Ratgebergespräch (ドイツ)

Thema: Angst; R= Ratgeber, H= ein Herr, A= Ansagerin

A: Anrufer, guten Abend!

H: Guten Abend

R: Guten Abend, erzählen Sie!

H: Ja, ich bin ein Mensch, dem es sehr gut geht, dem es ei-

R: Hu, hum

H: gentlich immer sehr gut gegangen ist. Von der Kindheit an, obwohl ich ein Kriegskind bin und zu den Leuten gehöre, die an die Hand Ihrer Mutter 20 Kilometer durch Eis und Schnee gegangen sind, für vier Eier, um am Leben zu bleiben. Ehh, ich habe

R: Huum

H: die Schule erfolgreich besucht, bin nie sitzengeblieben, habe zwei Mal das Abitur geschafft in der DDR und im Westen. Ich hab erfolgreich studiert. Ich hab erfolgreich meine zweite Staatsprüfung gemacht, bin seit 30 Jahren in meinem Beruf erfolgreich und lebe nur von der Angst. Aech, ich lebe, äußer-

R: Uhm

H: lich gesehen, in phantastischen Verhältnissen. Viele Menschen haben Grund, mich zu beneiden, also mich um meine Frau zu beneiden. Und ich lebe nur von der Angst. Das geht soweit, na gut, fangen wir mal etwas früher an. In der Schulzeit, ach, habe ich oft ständige Sorge gehabt, einmal sitzenzubleiben. Ich habe das nie verdrängen können und habe die Fingernägel

R: Hum, hum

H: abgekaut bis auf die Stümpfe. Wer diese Fingernägel angeschaut hat, der hat in schlichtes Grauen geschaut.

R: Hat sie denn jemand angeschaut?

H: Ja, natürlich, es hat sie ja jeder sehen

R: die Fingernägel?

H: können.

R: Hum, hum, aber hat es jemand gemerkt, was dahinter-

H: Ja, ntürlich

R: steckt, wie's ihm geht?

H: Ja, natürlich, eh, wie weit diese Angst

付録5：

# 'Talknet'

## TAPE 1 CONVERSATION 1

(L= Adviser, female; A= Guest, male; Thema= girl friend)

- 1 L: This is Lee, how are you ?
- T 2 A: How are you, Lee ?
- T 3 L: Greate.
- T 4 A: O.k. I'm 20 years old, I'm a college student, and I was dating, uh, this girl, for about four months. She, ah, told me she went a neighboring university near mine. I believe she she was 19 years old. Everything was going great, I thought, until one day I was with some friends and I saw her in the mall with some of her friends, and basically it turned out, she ah, she was only in highschool and she was sixteen.
- C 5 L: Whao
- 6 A: So, uh, needless to so say, you know, I ended the relationship immediately, but I'm kind of a scared senseless here. Am I gonna be arrested ?
- 7 L: No, no. You, you cut the relationship off. You did the right thing.
- 8 A: Right.
- 9 L: Do her parents know you were dating her ?
- A 10 A: Uh, I never met them. I mean, according to what she was telling me, they did, but I never met them, and I don't know what else she told me that wasn't true. I mean, they might not have, they might not have known. But, I mean, we were pretty serious.
- 2 T 11 L: Were you having a sexual relationship ?
- A T 12 A: Yeah. We were.
- 0 T 13 L: Whoa. Ok. Well look, I used to lie sometimes when I was a teenage girl.
- 8C 14 A: Uh huh.
- Im 15 L: I would tell the boys that I was older than I was, and this is difficult for young men.
- BC 16 A: Right.
- T. 17 L: That's why I can't blame young men. I only blame them when they know and

1:31

T

1:33

C

T

20 A: Yeah, she did not look sixteen.

BC, O

21 L: Yeah. What to do. You're probably better off just forgetting about the whole thing.

1:39

T

BC, Im 22 A: Yeah. I haven't spoken to her since, since that day, I mean.

1:41

BC

23 L: Un hum.

Im

24 A: I called her that night and spoke to her. She called me a few times. I just told her out right that night that we, you know, couldn't see each other any more.

1:50

T

IF

(25 L)

'Till she's eighteen.

1:51

Im

T

26 A: Well, that's not what I told her. I said we couldn't see each other any more. I mean, I don't want to be involved with someone who, you know, is gonna lie to that extent, but, you know, like I said, she hasn't indicated anything. I haven't received any kind of notification (Lee interrupts)...

2:05

T

IF

(27 L)

You're waiting for the, uh, (Guest interrupts)

2:07

IC

T

(28 A)

I'm waiting for a knock at the door.

2:10

BC

29 L: (Lee laughs)

Q

T

30 A: "Excuse me son....." uh, you know ?

A

T

31 L: Yeah. Yeah.

Im

T

32 A: I mean, I don't (Lee interrupts)....

2:15

IT

T

(33 L)

The jail bait boys.

BCQ

T

34 A: Right. Don't, don't women have to be eighteen years of age or older for me not to be at risk ?

2:20

T

A

T

35 L: Yeah. Yeah, thy do.

BC

T

36 A: Uh hmmm.

Im

T

37 L: And what could happen here, she get angry with you, tell her parents.... I, ah, you know what I would do. If I were you....

2:27

IQ

T

(38 A) What's that ?

## 文 献

- ボーグランド／ドレスラー：『テキスト言語学入門』紀伊国屋書店
- 異文化間教育学会：『異文化間教育』1－4、アカデミア出版会
- 茨山良夫、他：『英語授業のコミュニケーション活動』東京書籍 1994
- 垣田直巳：『英語の授業分析』大修館 1986
- 河上誓作：『認知言語学の基礎』研究社出版 1997
- 久野日章：『談話の文法』大修館 1994
- 倉地暁美：『対話からの異文化理解』勁草書房 1994
- 松本道弘：『交渉力の英語』講談社現代新書 9 2 3 1988
- 認知心理学講座 1、2、3、4 東京大学出版社 1982
- オースチン, J.L. : 『言語と行為』大修館 1982
- 大杉邦三：『会議英語』大修館 1980
- 大島 真：『談話文法研究』リーベル出版 1993
- 大滝祥子：『日本人の医学論文 abstract (抄録) にみる文化的差異』金沢医科大学教養論文集 22、1993
- 同 : 『日本人による論文作成レトリックの文化的差異』金沢医科大学教養論文集 23、1995
- 同 : 『How to Start and Finish Medical Research Writing』日本実用英語学会論叢、1996、No.4
- ライネルト, R. : 『Kooperative Studentenantworten』愛媛大学教養部紀要 11 号 1984
- リーチ, G.N. : 『語用論』紀伊国屋書店 1989
- スタッズス, M. : 『談話分析——自然言語の社会言語学的分析』研究社出版 1989
- 佐野政之、他：『異文化理解のストラテジー』大修館 1995
- 下川 浩：『現代日本語構文法』三省堂 1993
- 津田早苗：『談話分析とコミュニケーション』リーベル出版 1994
- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ：『学習者中心の英語読解指導』大修館 1994
- : 『英語速読法』
- Austin, J. : How to do things with words, London Oxford 1962
- Balota, D: Comprehension Processes in Reading. Lawrence Erlbaum Associates, 1990
- Baugrand/Dressler: Textlinguistik. Tübingen, Niemeyer 1981
- Carroll, D.W. : Psychology of Language. Books/Cole Publishing Company, 1986
- Clancy, P. : Written and Spoken Style in Japanese Narratives. In: Spoken and Written Language, D. Tannen (ed), Ablex, New Jersey, 1982
- van Dijk: Textwissenschaft. Deutscher Taschenbuch Vlg, München 1980
- Ehlich, K. : Diskursanalyse in Europa. Peterlang Vlg, 1994

- Erickson, F. & Schultz: The Counselor as Gatekeeper. In: Social Interaction in Interviews. Academic Press, 1982
- Flanders, N. A.: Analysing Teaching Behavior. Addison Wesley, 1970
- Franke, W.: Elementare Dialogstrukturen. Niemeyer Vlg, 1990
- Graesser, A. C.: How to catch a fish. In Discourse Processes, I, 72-89
- Grice, H.: Logic and Conversation. In: Syntax and Semantics, vol. 3, Speech Acts, Academic Press, 1975
- Gülich/Raible: Textsorten. Athenaion, 1975
- Gumperz, J. J.: Language and the Communication of Social Identity. In: Language and Social Identity, Cambridge University Press, 1982
- Jefferson, G.: A Case of Precision timing in Ordinary Conversation. In: Semiotica, 9, 1,
- Kintsch, W.: On Comprehending Stories. In: Just/Carpenter (Hrsg): Cognitive Processes in Comprehension. Hillsdale, N. J. Erlbaum, 1977
- Levinson, S. C.: Pragmatics. Cambridge Textbooks in Linguistics, Cambridge University Press, 1983
- Lycan, W. G.: Conversation, Politeness and Interruption. Papers in Linguistics, Champaign, Illinois, 10, 1/2
- Maynard, S.: Japanese Conversation: Self Contextualization through Structure and Interac-tional Management. Ablex, New Jersey, 1989 Press, London 1975
- Schank, R./Abelson, R.: Scripts. Plans, Goals, and Understanding. Hillsdale, N. J., Erlbaum, 1977
- Searle, J.: Speech Acts, London Cambridge University Press, 1969
- Sinclair, J. McH and Coulthard, M.: Towards an Analysis of Discourse. Oxford University
- Stubbs, M.: Discourse Analysis. The Sociolinguistic Analysis of Natural Language. The University of Chicago Press, 1983
- Swales, J.: Genre Analysis. Cambridge Uni. Press, 1990
- Tannen, D.: Conversation Style: Analyzing Talk among Friend. Ablex, New Jersey, 1984
- Thorndyk, P. E.: Cognitive structures in comprehension and memory of narrative discourse. In: Cognitive Psychology, 9, 1977
- Weigand, E.: Sprache als Dialog. Niemeyer, 1989
- Winograd, T. A.: Frame representation and the declarative procedural controversy. In: Bobrow./Collins eds. Representation and understanding. New York, Academic Press, 1975
- Yamada, H.: Topic Management and turn distribution in Buisness Meetings. In: Text,



10, (3), 1990.

Yamada, H.: American and Japanese Business Discourse. Ablex Publishing Corporation  
1992

大滝敏夫：「言語教育と文学教育」 金沢大学文学部論集、文学科編 4 号 1984

〃：「テキスト受容行為の経験的研究」 金沢大学文学部論集、文学科編 6 号 1986

〃：「テキスト分析の経験的研究」 In: 『テキスト分析の研究』昭和 62 年度科学研究費補助金（総合研究 A）研究成果報告書 1988

〃：「認知科学のテキスト言語学へのアプローチ」 金沢大学文学部論集、文学科編 9 号 1989

〃：「Das Literatur-System in Japan」 金沢大学文学部論集、文学科編 10 号 1990

〃：「Vorschlag der Verbesserung des Literaturunterrichts」 In: Ed. E. Ibsch, D. Schram, G. Steen 『Empirical Studies of Literature--『Proceedings of the Second IGEL- Conference, Amsterdam 1989』 Rodopi, Amsterdam-Atlanta, GA 1991

〃：「異文化コミュニケーションー言語行動および非言語行動の比較」 金沢大学文学部論集、文学科編 12 号 1992

〃：「対話の言語行動比較ーラジオにおける“talknet”と「人生相談」 金沢大学文学部論集、文学科編 13 号 1993

〃：「比較文学之基本探討」（易 侯 訳） In: Han-Liang Chang 『東西文学理論 Concepts of Literary Theory East & West』 中華民国比較文学学会 1993 年 9 月

〃：「Wahrnehmungstheorie und empirische Literaturwissenschaft」 In: 『大会文集』 Chinesisch-Japanisches Germanistentreffen Beijing 1990, 1994

〃：「Recent Tendencies of the Literature-System in Japan」 In: Empirical Approaches to Literature, LUMIS-Publication Special Issue Volume VI, 1995

〃：「ほめことばの日独比較」 In: 『日本語学』 5 月号、明治書院 1996

〃：「Ein Vergleich der sprachlichen Handlungen des Beratungsgesprächs in Radiosendungen in Japan, Deutschland und U S A. In: E-INTERNET //www.kclcl.or.jp/humboldt/ /, 1996

〃：「認知心理学に基づく外国語教育」 金沢大学外国語教育研究センター紀要『言語文化論叢』 第 1 号 1997

〃：「授業分析とコミュニケーション授業」 金沢大学外国語教育研究センター紀要『言語文化論叢』 第 2 号 1998